

「日米安保条約が破棄される日」

福山隆 (2012. 3. 16)

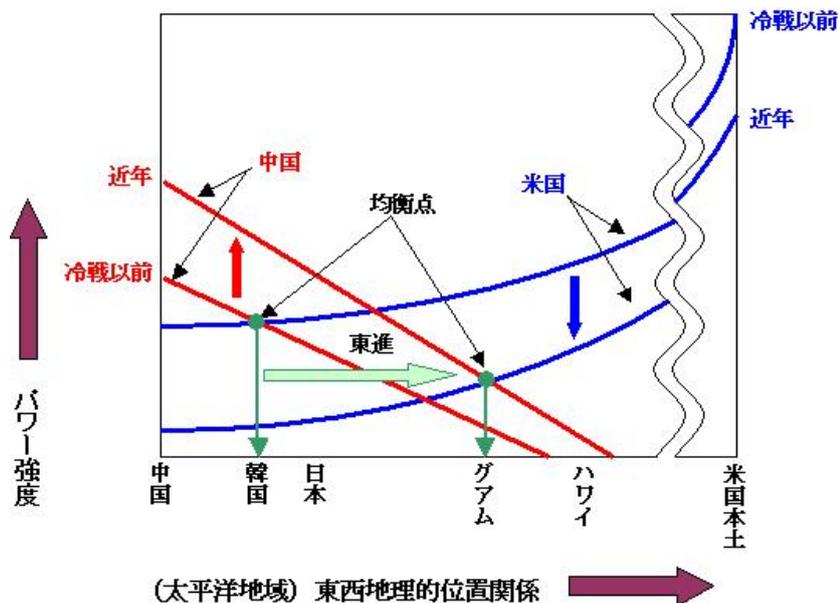
「朝鮮半島が危ない」で編纂委員をつとめた福山隆氏（元陸上自衛隊西部方面幕僚長・陸将）が中央ジャーナルに寄稿した論文の中から、日米安保の部分を抜粋掲載します。（掲載責任：松島悠佐、2012・4・26）

● 米国の凋落と中国の台頭が引き起こす北東アジアの戦略環境の変化

米国の凋落と中国の台頭という文脈の中で、米中の軍事バランスが変化しつつある。米国は財政赤字削減の一環として、地上戦力を計 10 万人（陸軍 8 万人、海兵隊 2 万人）削減する一方、開発経費が高騰した最新鋭ステルス戦闘機 F35 の調達を先送りするなどして、5 年間で計 2590 億ドル（約 20 兆円）を削減する。一方の中国は、過去 23 年間に 89 年を除き 2 桁で増やしている。

この結果、下のイメージ図のように米国と中国の軍事バランスの均衡点は、東に移動しつつある。冷戦時代から冷戦直後の米国の一極支配時代におけるパワーの均衡点は朝鮮半島の非武装地帯（DMZ）にあったものが、中国の台頭と共に東に移動しやがて、釜山、日本列島（第一列島線）と移動していくだろう。その結果、まず韓国が中国のパワーが米国よりも上回る圏内に入るだろう。そしてやがては日本も中国の勢力圏に入る日が来るかもしれない。

一昨年に起こった、韓国海軍哨戒艇撃沈事件やヨンビョン島砲撃事件などは、朝鮮半島においては既に、米軍よりも中国軍のパワーの方が上回っていることを裏付ける証左かもしれない。



- 米国に見捨てられる韓国の恐怖

韓国最有力紙の朝鮮日報は2月11日付で「日本と中国の二者択一を迫る米国」と題する驚くべき社説を載せた。同社説は「(4月に国会議員選挙が、12月に大統領選挙が予定されるが) 政権獲得を目指す人物も政党も、今なお厳然と近付いている国家生存の岐路で、大韓民国と国民が今後も生存し続けるために進むべき道を提示する義務がある」と締めくくり、間近に迫った選挙を通じ「中国を頼るか、日本と結ぶか、あるいは核武装するか、国の針路を定めよう」と国民に呼びかけた。

この社説は、かつて米国で大統領補佐官(国家安全保障担当)を務めたブレジンスキー氏が最近出版した「戦略的なビジョン: アメリカとグローバルパワーの危機」と題する著書に端を発する。ブレジンスキー氏は同著で「米国の衰退は韓国に苦渋の選択を迫るようになるだろう」とした上で、韓国には「中国による東アジアの覇権を受け入れ、中国とさらに接近する」道と「歴史的な反感にも関わらず、日本との関係をさらに強化する」という二つの道が選択肢として提示されていると明言している。同氏はさらに、「米国の衰退で、米国が提供して北“核の傘”への信頼が低下すれば、韓国と日本は(米国以外の)新たな傘を求めるか、あるいは自国で核武装を迫られるだろう」とも述べている。

- 朝鮮日報の論説は杞憂なのか

中国古代の杞の人が「天が崩れ落ちてきはしないか」と心配したという故事から、心配する必要も無いことをあれこれ心配することを「杞憂」という。ブレジンスキーの主張に警鐘を鳴らす朝鮮日報の論説は杞憂なのだろうか。

いや、そうではない、民族・国家の安全を考えればむしろ健全な感覚だと思う。安全保障は、最悪のシナリオを前提として準備するのが国際常識なのだ。日本人は、戦後、長く米国の庇護の下に長く置かれ、安全保障を「人任せ」にする性向が定着した。平和ボケしてしまったのだ。日本では、ブレジンスキーの新著に反応し、朝日新聞や読売新聞が朝鮮日報と同じような反応を示すことは期待できない。

- 「日米安保条約が破棄される日」に備える手立て

日清戦争後ロシアの中国進出に対抗するため締結した日英同盟(1902年)も、同同盟の廃止を望むアメリカの思惑などにより約20年後には解消した。1951年に締結された日米安保条約も、「還暦」を過ぎた。

凋落する米国は日米安保条約をどうするのだろうか。米国は韓国と同様に日本を見捨てる日が来るかもしれない。わが国も「日米安保条約が破棄される日」という最悪のシナリオを想定し、その対応策を今のうちから研究するのもムダではあるまい。(完)